



Title	異文化接触場面における参加者間の関係性—大学および地域社会の3つのフィールドから—
Author(s)	服部, 圭子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47168
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 **服 部 圭 子**

博士の専攻分野の名称 **博 士（言語文化学）**

学 位 記 番 号 **第 2 1 2 9 5 号**

学 位 授 与 年 月 日 **平成 19 年 3 月 23 日**

学 位 授 与 の 要 件 **学位規則第 4 条第 1 項該当**

言語文化研究科言語文化学専攻

学 位 論 文 名 **異文化接触場面における参加者間の関係性
ー大学および地域社会の 3 つのフィールドからー**

論 文 審 査 委 員 **（主査）
教 授 三 牧 陽 子**

**（副査）
教 授 津 田 葵 助教授 渡 邊 伸 治**

論 文 内 容 の 要 旨

近年、日本社会には様々な外国人が滞在しており、わが国の多文化化は急速に進んできている。しかし、日本人と外国人との関わりは非常に薄く必ずしも両者関係が良好ではない現状がある。大学で学ぶ留学生が日本人学生との交流が進まず、真の友人関係が築きにくかったり、居場所を見つけられないという状況は先行研究でも指摘されている（坪井 1999；服部 2002 他）。地域での活動の場面でも、外国籍の人々の経験や「声を伝える相手にめぐり合えず、日本人に対して常に非対称な受け身の立場に置かれている」という指摘も多い（異文化間教育学会編 1999）。このように、国際交流や善意のボランティアを念頭に行なう日本人の行為の中にも、無意識のうちに留学生や外国籍の人々を周縁化している可能性がある。具体的な異文化接触場面の参加者間の関係性、特に日本人参加者が外国人をどのように捉えているのかに関する実態を解明することは、多文化共生社会を目指すに当たり、日本社会の新たなあり方を考える上で、また日本人態度の養成や教育の面において重要であると考えた。

本論文の目的は、異文化接触場面に関わる参加者が相手をどのように捉えているのかに関する実態を明らかにするとともに、時間の経過に伴って生じる参加者間の関係性の変化と変化をもたらす気づきの観察を行う。これは、多文化共生社会の実現に向けて必要な、マジョリティである日本人の態度を解明し養成することを念頭に置き、その可能性と課題を抽出することである。様々な異文化接触場面のうち、具体的には、「アカデミックドメイン」として、理工系大学院研究室における学位取得を目的とした留学生が所属する研究室（フィールド 1）、および交流や異文化経験を目的とした学部大学での日本人学生と交換留学生との交流活動（フィールド 2）を、「地域（社会）ドメイン」として、地域における地域日本語活動（フィールド 3）に参加するボランティアと外国人参加者を挙げた。これらの性質の異なる 3 種のフィールドを対象とし、参加者へのインタビューや交流実践でのデータを分析することによって、変化の実態と課題を明らかにした。

まず第 1 章で、このような問題意識や研究の目的を述べた後、第 2 章では大学の留学生と日本人との関係性や、地域の日本語支援活動に関する先行研究を概観した上で、背景となる関連概念を紹介した。本論文の意義としては、ケーススタディとして複数の異文化接触場面や先行研究にない対象を扱い、現場から得た実際データをもとに分析していること、外国籍の人々と日本人と対等な関係性や、外国籍の人々の受け入れ施策を考える上で、また教育面に貢献する可能性があることなどが挙げられる。

本論文で扱ったデータを分析するにあたり、第3章では、その背景となる主要概念と分析の枠組みについて述べた。異文化接触場面での参加者間の非対称な関係性を検証する道具として、まずカテゴリー化の概念を用いた。本論文では、大堀（2002）、西阪（1997）を援用し、有意なまとまりを持った情報として受け取り、その対象の帰属について判断することをカテゴリー化とした。また、そのカテゴリー化は、〈いまーここ〉の相互作用において個々の参加者が互いに意味づけを行なって、維持・変容していくという視点を伴っているという考えのもとに、3つのフィールドにおける参加者が互いをどのようにカテゴリー化して捉えているのかについて明らかにした。これは、主に日本人の語りの中に外国人に対するどのようなカテゴリー化が見出されるのか、そのカテゴリーに属するものとして自らを位置づけることは互いの行為を制約してはいないかという観点で観察することが可能であると考えたからである。また「ホスト・ゲスト」の捉え方を概観し、本論文の視点を示した。

さらに、特にフィールド2で得た相互作用のデータの分析の枠組みとしては、相互作用の社会言語学におけるGoffman（1981）の参加の枠組みや産出フォーマット（Goffman1981）、そしてフッティング（Goffman1981）を使用した。なお、フィールド1、フィールド3におけるデータはインタビューによるものが中心であるが、インタビューでの語りを客観的な事実の報告とは捉えずに、その中に語り手の経験や出来事に対する意味づけや解釈が伴われているものであるとみなし、筆者を含む調査者との相互行為としての語りの側面にも焦点を当てることについて述べた。

第4章では、本論文で扱う対象と各々のフィールドでの調査方法について記述した。フィールド1の対象は、関西の総合大学の理工系研究室であり、調査は2つの研究室の日本人構成員と留学生に対して2004年1月から2005年6月に定期的・継続的なインタビューという形式で実施された。フィールド2は、関西の私立大学学部の大学生および交換留学生を対象としている。大学の現場における日本人学生と留学生の対話の場を創るために、筆者が企画運営を行い2001年5月から2003年12月まで実施された交流実践のうち、2001年5月から2002年2月までの相互行為の記録をデータとした。また、日本人学生と留学生双方の感想文も分析対象とした。フィールド3の対象は、大阪府下の地域日本語支援活動に関わる日本人ボランティア11名で、2004年3月から4月と、2005年9月から10月の2回にインタビューを行った。外国人参加者5名へのインタビューも参考資料とした。

第5章と第6章では、実際のデータの分析を行った。第5章では、3つのフィールド各々に参加する日本人参加者が、その異文化接触面で共に研究や活動を行う外国人をどのように捉えているのかの関係性を、語りに見られるカテゴリーを抽出することによって論じた。さらに、時間を経たインタビューや実践をもとに、日本人参加者が、自分のポジションから相手をどのように捉えているのかという参加者間の関係性の変化をカテゴリーの側面から観察し、その要因を考察した。この章では、特に、フィールド1を中心的に分析・記述した。理工系研究室という長時間共に過ごす研究室内には、暗黙のうちに日本人構成員に継承されている規範があり、それらに影響を受けながら相手をカテゴリー化しているといえる。それらをもとに、文化的背景の異なる留学生が日本人構成員にいかにつまみ食い、また各々の評価に繋がっているのかの実態を、インタビューデータから明らかにできると考えたからである。国際的感覚を養うことをも目的に留学生を積極的に受け入れている研究室であるので、研究内の相互行為による変化の解明も、大学内での多文化共生の実現に向けての一助となると考えた。

フィールド1の分析の結果、理工系大学院研究室Bにおいて日本人構成員が留学生をつまみ食うに当たり、「身分・立場」「コミュニケーション能力」「嗜好」などの様々なカテゴリーが見出された。その中でも、特に「日本人ー留学生」は留学生に特有に付与されるカテゴリーであり、「ホスト・ゲスト」カテゴリー対と密接に関わっているものであった。これらの見出された様々なカテゴリーが複雑に絡み合い、その総和として日本人構成員による留学生の評価がなされていることが分かった。研究室文化における暗黙の規範による評価からも、留学生が不利な立場に置かれる可能性があることの一端が見て取れた。研究室での互いの捉え方が個別化するようになった際にも、再び「日本人ー留学生」カテゴリー化を使用することで相手を評価していた。しかしながら、参加者の意識を細かく観察すると、共同研究などを契機に変化が見られた。フィールド2における交流実践の参加者たちも様々なカテゴリーで互いを捉え、またその根底には、「日本人ー留学生」「ホスト・ゲスト」という意識が見られた。しかし、時間の経過とともに、共有するカテゴリーである「外国語学習者」として相手を捉え、「司会者」として各々が自覚したり互いにつまみ食い、参加者に認められるようになる様子も窺えた。フィールド3においても、様々なカテゴリーが観察され、それらは活

動内外の接続の可能性を秘めていた。だが、活動の動機や意義を語る上で、多くのボランティアが〈教える人―教えられる人〉や、ボランティアが「ホスト」する人であるという意識を表明した。約1年半後のインタビューでは、「社会経験」や「環境」、人生の先輩としての「年齢」などの様々なカテゴリーを意識的・自覚的に互いの関係性に寄与するものとして語るように変化していた。今後の活動の発展に期待される場所であるが、同時に根底には、非対称な関係性が、根強くあることも確認された。

第6章では、時間の経過と共に相手との関係性における個々人の位置づけの変化を観察した。本章での分析は、フィールド2に焦点を当てて行った。交流実践という週2回の交流会における、日本人と留学生相互の会話データをもとに、そこに関わる参加者たちのローカルな側面での変化が観察されると考えたからである。毎週の交流会での相互行為を通して、序々に日本人学生と留学生の互いの関係性における変化が観察された。会話データや参加者の感想文から、契機となった活動などの視点を用いて、共同体全体の推移を参加者間の相互作用の側面から見ると、10区分の時期の特徴が明らかになった。まず、共同体における活動全体の流れを捉え、その後、個々の参加者がいかに変化し、そこには何らかの学びが生じたのかについて、その契機を探りつつ分析を行った。

さらに、個々の参加者の相互作用の詳細を Goffman (1981) を参照しつつ分析を行ったところ、一方通行の情報交換による初期の頃の話は、テレビ番組に出演する俳優など共通のフィギュアへの言及が主であった。だが次第に、個別の学外での体験を重ねて個人的な話題へと移行するにつれ、登場する共通のフィギュアは実体験に基づいたもので、現場の息遣いが感じられる共有の話題を提供し、共同体内の話題展開に貢献する様子が窺えた。当初みられた複数の日本人学生が互いに協働的にプリンシパルとしての意見を調整するという参加の枠組は、共同体自体の歴史の積み重なりを経て、各々の参加者がプリンシパルとして意見を述べあう関係性へと変化していった。後半には、学生として、司会役として、若者同士としてのフットイングがダイナミックに絡み合って相互行為が進むようになった。

第7章では、結論としてこれまでの分析と考察を総括し、対象とした2つのドメインの3つのフィールドにおける各々の現状と課題を整理し、その共通性と個別性について述べた。いずれのフィールドにおいても、時間や経験を重ねて変化が起っていたといえるが、その変化の起こり方はフィールドによって異なるものであった。

最後に、本論文が今後の研究に与える示唆、および今後の課題について検討した。このように、3つの異文化接触場面の参加者間には、相手および自分に対する気づきが生じており、それは多文化共生に向けての一步である。しかしその背後には、揺るぎがたい規範や個々人の立場があり、組織全体のパラダイムの変換や、教育に委ねる側面が必要であることが見出され、これは今後の大学および地域の課題であるといえる。さらには、各々のフィールドにおいて適切だと思われる介入者の養成を考えることも重要であろう。今後の課題としては、インタビュー調査の手法の検討、外国人側の捉え方の調査、教育のありかたとの関わりの検討などが挙げられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、多文化化が進行する日本において多文化共生社会の実現には異文化接触場面の実態解明や日本人の意識の改革が急務であるとの問題意識に基づき、マジョリティである日本人側に焦点を絞り、意識・態度に関する可能性と課題を抽出することを目的としている。本研究の特徴は、様々な異文化接触場面のうち、「アカデミックドメイン」として、学位取得を目的とした留学生が所属する理工系大学院の研究室（フィールド1）、交流や異文化経験を目的とした交換留学生と日本人学生との大学学部における交流活動（フィールド2）、「地域ドメイン」としてボランティアと外国籍住民による地域日本語活動（フィールド3）という、性質の異なる3種のフィールドを対象として取り上げ、各々の参加者へのインタビューや交流実践で得られた膨大なデータを分析することによって多面的に日本人側の捉え方の実態と課題を追求した点にある。

研究課題、先行研究、分析の枠組み、データと方法論について第4章までで述べた後、第5章ではカテゴリー化の概念を用いて参加者間の捉え方を分析した結果、3つのフィールドに共通して多様なカテゴリーが見出されたことは、従来指摘されてきた「教える―教えられる」非対称な関係性にみる2項対立的なパラダイムの修正を迫るものであると指摘した。「日本人―外国人」「ホスト―ゲスト」意識は、接触や交流が進むと共に薄れ、個別化が進む傾向にあ

ることが実証的に観察されたものの、根底には根強く存在することもまた確認された。第6章は、主にフィールド2の交流実践参加者の相互作用を Goffman (1981) の参加の枠組み、産出フォーマット、フットイングの概念を用いて詳細に論じ、学内外での体験を重ねることによって、話題に登場するフィギュアの変化、および、各参加者がプリンシパルとして意見を述べあう関係性へと参加の枠組みが変化し、学生/司会役/若者同士としてのフットイングがダイナミックに絡み合って相互行為が進むようになったことを明らかにし、交流実践活動の可能性を示唆した。第7章では各フィールドで得られた結果の共通性と個別性を指摘した上で、根強い「ホスト-ゲスト」関係性を崩すための方策を検討することが必要であり、どの現場にもコーディネータ的な存在とその養成が不可欠であると論じた。

対象としたフィールドの多様性、および、数年にわたる時間経過に伴って生じる参加者間の関係性の変化と変化をもたらす気づきを詳細に分析した本研究は、この分野において類を見ない力作である。方法論的には、意識の変化と相互作用データ双方から「変化」を検証すれば説得力が増したと思われるが、フィールドの特性を生かした分析は専門を異にする読者にも興味深く、示唆に富む。今後、本研究から得られた知見を、提言としてより明確な形で示すことによって、外国語学習を含め異文化接触場面において実践に携わる人々に還元されることが期待される。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。